

田中浩 編

田中浩

重森臣広

行安茂

木塚佳

田中裕男

加藤節郎

成田龍三

杉田政

一栗真

新川敏光

デジタル・デモクラシーとソーシャル・デモクラシー

現代世界——その思想と歴史①

田中浩 編



9784624301187



1324301187

ISBN9784624301187

C50504723005

定価 1,800円(税別)

自由と平等の相克を超えて

田中浩の政治思想

現代社会の自由と平等の相克を乗り越える。田中浩の政治思想を、その思想的背景と実践的意義から探る。田中浩の政治思想は、自由と平等の相克を乗り越えるための重要な鍵を握っている。本書は、田中浩の政治思想の全貌を明らかにし、その思想的背景と実践的意義を明らかにする。田中浩の政治思想は、自由と平等の相克を乗り越えるための重要な鍵を握っている。本書は、田中浩の政治思想の全貌を明らかにし、その思想的背景と実践的意義を明らかにする。

田中 浩	
リベラル・デモクラシーからソーシャル・デモクラシーへ	
——現代世界の思想を理解する二視点として……………	7
重森臣広	
イギリス自由主義の変容——自助・共助・公助をめぐるせめぎあいから……………	29
行安 茂	
リベラル・デモクラシーの展開——トマス・ヒル・グリーンを中心として……………	49
大塚 桂	
新自由主義と社会連帯主義——わたしの研究備忘録……………	67
田中治男	
フランスにおける二つのデモクラシー——歴史的展望の中で……………	83
加藤哲郎	
社会民主主義の国際連帯と生命力——一九四四年ストックホルムの記録から……………	101
成田龍一	
「東京裁判三部作」の井上ひさし……………	123
杉田 敦	
社会と境界……………	143
千葉 眞	
社会保障の劣化と民主主義——ラディカル・デモクラシーの視点から……………	161
新川敏光	
リベラル・ソーシャル・デモクラシーの彼方へ……………	181
あとがき——「現代世界——その思想と歴史」完結に寄せて……………	201

フランスの憲法学者オリヴィエ・デュアメルが憲法評議会について述べたとされる次の言葉は、フランス国民の政権選択に際しての態度についても当てはまるものと言えよう。それは、「社会主義的政権交替を一七八九年の自由主義的限界内に、保守主義的政権交替を一九四六年の社会主義的限界内に抑えること」(フラン・デュアメル『ドゴールとミッテラン——知印と足跡の比較』、四九五)という言葉である。

フランスの政治体制は、なお論争的課題を抱え、対決状況を控えているが、この大枠の中で進展して行くものと考えられよう。

【参考文献】

- アレクサンダー・ワイス『フランス現代史』全三巻、野口名隨・高坂正範訳、みすず書房、一九五八—一九五九年
- 田中治男『フランス自由主義の生成と展開——十九世紀フランス政治思想研究』東京大学出版会、一九七〇年
- 中木康夫『フランス政治史』全三巻、未來社、一九七五—七六年
- ジュリアン・ジャクスン『フランス人民戦線史——民主主義の擁護、1934—38年』向井喜典他訳、昭和堂、一九九二年
- 吉田徹『ミッテラン社会党の転換——社会主義から欧州統合へ』法政大学出版局、二〇〇八年

社会民主主義の国際連帯と生命力——一九四四年ストックホルムの記録から

加藤哲郎

1 崎村茂樹という経済学者を知りませんか？

私はいま、二〇世紀をきたある日本人の軌跡を追って、英語及び日本語のホームページ「ネチス・ンカレッジ」で、情報提供を呼びかけている。名前を「崎村茂樹(きむら・しげき)」という。東京で一九〇九年に生まれ、一九八二年に没した。戦前日本で東京帝国大学農学部講師(農業経済専攻)であったから、いくつか学術論文はある。戦後も拓殖大学教授・東京理科大学教授をつとめ、当時は最先端の工業特許や知的所有権の研究・教育にたずさわったから、その方面で知っている人はいるかもしれない。語学の天才でもあった。経済学の師は戦時東大経済学部フアンシヨ化の一翼を担う荒木光太郎教授であったが、ドイツ語は丸山眞男と同じく、当時反ナチスで知られた上野大学ヨハネス・クラウス神父に学んだ。とりあえず、研究者としての崎村茂樹の概要を示しておこう。以下の資料収集とリスト作成にあた

つては、前ベルリン日独センター調査部長桑原節子氏、京都大学文書館助教福家崇洋氏にご協力いただいた。このほかの著作・論文ないし消息をご存じの方は、ぜひ筆者 (katote@t.t.u-tor.jp) まで連絡してほしい。

崎村茂樹著作・論文一覧(二〇二二年二月現在 筆者作成)

- 一九三三年「滿州農作物の銀資金日滿經濟發展の視点に立ちて」(『農業經濟研究』第九卷四号)
- 一九三五年「農家負債問題の検討」(『財政經濟時報』第三卷八号)
- 一九三六年「アメリカ銀政策の發展」(『財政經濟時報』第三卷卷号)
- 「アメリカ銀政策の本質と意義」(『東亞』第八卷七号)
- 一九三七年「オープン・マーケット・オペレーションの矛盾」(『外交時報』第七七号)
- 「一般信用理論に於ける組合信用の地位」(『農業經濟研究』第三卷二号)
- 「ハイエックの賦氣理論と利子説——最近の新学説(1)——(3)」(『ダイヤモンド』第五卷二一・二二・二三号)
- ヨハネス・ラウレス著『スコラ学派の貨幣論』(翻訳、有斐閣)
- 「農村人口移動の階級性とその社會經濟的諸要因福井縣下農村調査中間報告」(京野正樹・神谷隆平共著『農業經濟研究』第三卷四号)
- 「農村人口移動の階級性とその社會經濟的諸要因福井縣下農村調査中間報告」(『經濟學論叢』第八卷四号)
- 「農村人口移動の階級性とその社會經濟的諸要因福井縣下農村調査中間報告」(『農業經濟研究』第四卷号)
- 「北支農村經濟の諸問題」(『北支經濟研究の根本問題』刀江書院)
- 「北支の幣制と農民經濟」(『帝國農學』第八卷九号)
- 一九三九年 報告「軍事下の農業問題を主題として」(『日本農學研究報告』第五輯・經濟學)
- 「農業政策の社會哲學的基礎付けへの試み(其の1・2)」(『食糧經濟』第五卷三十四号)
- 「民族主義と農民」(『エコノミスト』第二十七卷一六号)
- 「北支の食糧問題」(北京にて『食糧經濟』第五卷二一号)
- 「労働政策としての農業政策」(『農業と經濟』第六卷二二号)
- 一九四〇年「日本農業技術の發展に關する覚書」(『農政』第二卷八号)
- 「朝鮮農民の内地農村定着」(『大陸』第三卷八号)
- 「稲作に於ける中耕・除草技術の發展過程」(『農業經濟研究』第六卷三三号)
- 「北支の食糧問題」(『東郷第二著』『米』中央公論社付録)
- 「北支における小作形態の考察」(『近藤謙男他編』『經濟學博士福澤正金農業經濟學論叢』日本評論社)
- 一九四一年「蘭印に於けるアランテイションと苦力政策の問題」(『新滿洲』第三卷一五号)
- 「國策会社と産業組合」(『朝日新聞』『産業組合』第四三六号)
- 報告「滿州國建設と五族共和」(第三回日滿交換會議、ナホル)

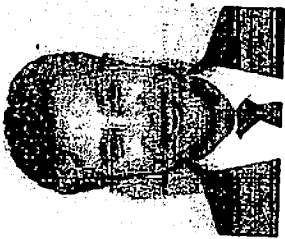
- 一九五六年「通貨交換性と貿易自由化」(『拓殖大学論集』第二号)
- 一九五七年「E.P.U.と通貨交換性」(『拓殖大学論集』第三号)
- 『経営パートナーシップについて』(『拓殖大学論集』第二号)
- フリードリッヒ・ヒス・ゴーゼン著『アメリカにおける利潤分配の実際、西ドイツの訪米視察団報告書』(翻訳、日本生産者本部)
- 「公正賃金とパートナーシップ——西独の労使協調はいかに行われているか」(『経済生活』五七年一〇月号)
- 一九六〇年「特許ライセンス研究序説、アメリカの反トラスト法との関連において」(『拓殖大学論集』第二五号)

ドイツ語著作

- Neuordnung der japanischen Wirtschaft, Bremen: NS.-Gauverl. Weser-Ems, 1942 (『日本経済の再編成』ツァイマール本谷ほか所蔵)
- Die Berufsausbildung der Jugend im nazistischen Deutschland, in: Briefwechsel aus dem schwedischen Exil (『ナチス・ドイツの青年の職業教育』ボン大学フランク・モクラアー文庫所蔵)

「『社会民主主義』との関係は、一九三五年の共産論文『農村人口移動の階級性とその社会経済的諸要因』などに、マルクス主義的方法的影響を見出せないわけではない。他方で、経済自由主義者ハイエクの翻訳も行なっている。ドイツ語著作のタイトルは、執筆当時ドイツで一緒だった笠原太郎『日本経済の再編成』(中央公論社、一九三九年)を想起させる。総じて理論紹介・実証分析が多く、なんらかの思想的立場・方法的一貫性は見出しにくい。これらの学術の仕事からの『社会民主主義』への接近は難しい。

しかし、崎村茂樹の生涯を追いかけていくと、社会民主主義との奇妙な接点が見えてくる。以下は、むしろ本書を通して情報提供を求めるための、崎村茂樹が第二次世界大戦中のストックホルムで接触した社会民主主義「小インターナショナル」についての覚え書きである。



崎村茂樹

2 戦時在独日本大使館からの「亡命」者・崎村茂樹

政治学者で現代政治・現代史を「情報戦」の観点から研究している私が関心をもつのは、経済学者としての崎村茂樹の業績や生涯ではない。第二次世界大戦期及び戦後占領期の国際情報戦のなかで彼が果たした、数奇な役割である。

それは第一に、崎村が、第二次世界大戦中の一九四三―四四年にベルリンの駐独日本大使館囑託でありながら中立国スウェーデンに「亡命」し、当時の「ニューヨーク・タイムズ」「タイム」等連合国側メディアで「初めて連合国に加わろうとした日本人」「枢軸国の敗北を初めて公言した日本人」と報道された、希有な体験の持ち主だからである。

第二に、崎村は、一九五〇年には中国革命直後の北京に住んでおり、中国側の資料と当時の日本での報道によれば、「毛沢東暗殺未遂事件」に関わったとされる点である。

これまで判明している崎村の生涯は、おおむね以下の通りである。

- 一九〇九年、東京に生まれる、高知高等学校理科乙類から東京帝大農学部農業経済学科卒業。
- 一九三三年、東京帝大経済学部荒木光太郎教授の助手、のち上智大学講師、東大農学部助手・講師。
- 一九四一年、外務省囑託として渡独、独ソ戦開始により帰国予定を変更して残留、日本鉄鋼統制会ベルリン事務所の囑託となる。
- 一九四三年、在独日本大使館囑託時にスウェーデンに渡航して「亡命」、ストックホルムで連合国軍にも接触。
- 一九四四年五月「ニューヨーク・タイムズ」で「枢軸国の敗北を初めて公言した日本人」と報道され、オチス・ゲンユタボと日本大使館の捜索・拘束によりベルリンに強制送還、大使館監視下でベル

リンに監禁された。この間、ドイツ・スウェーデン、在独日本人一行と共にシベリア経由満州国へ、しかし日本には帰国せず長春（当時の通称）滞在。

- 一九四六年、在中国、長春米領事館に通訳・経済分析担当で勤務。
- 一九四八年、在北京米領事館勤務員、北京陥落、米領事館台湾移転後も北京に残留。
- 一九五〇年、建国直後の中華人民共和国で「米領事館通訳」として逮捕され禁固刑、日本では「毛沢東暗殺未遂事件」に連座と報道される（毎日新聞一九五二年八月二日）。日本の留守家族は、この報道で初めて、崎村茂樹が戦後に生きていた消息を知る。
- 一九五五年、拘束を解かれ中国から帰国、矢部貞治学長に請われて、拓殖大学経済学部教授。
- 一九六一年、日本鉄鋼統制会ベルリン事務所時代の上司八幡製鉄島村哲夫常務に請われ、八幡製鉄囑託、東京理科大学教授（工業部担当）。ただし、ドイツ・スウェーデン・中国での一五年間の体験については、帰国後家族にもほとんど語らなかつた。
- 一九八二年、食道ガンを死去。

だが、崎村茂樹の生涯は、謎だらけである。ご遺族も、一九四一年の訪独から五五年の中国からの帰国までの「空白の一五年間」について、詳しいことを知らない。私のホームページ「ホチスンケルン」には、「崎村茂樹の六つの謎」がかかげられ、現在も情報提供を求めている (<http://www.h33.jp.or.jp/~katole/Home.html>)。

- ①若き崎村茂樹は、リベラル左派だったのか、親ナチ右派だったのか？
- ②崎村茂樹は、なぜスウェーデンに「亡命」したのか？
- ③崎村茂樹の一九四三―四四年「亡命」は、連合国軍との「和平工作」を意味するか？
- ④いつたん「亡命」した崎村茂樹は、なぜベルリンに戻り、ドイツ敗戦をいかに迎えたか？
- ⑤一九四五年五月ドイツ敗戦で、崎村茂樹は、なぜ日本に戻らず、中国に向かったのか？
- ⑥一九四五年九月以降、崎村茂樹は、なぜ中国に残り、何をしていたのか？

3 崎村茂樹のユダヤ人救出とスウェーデン「亡命」

もともと崎村茂樹という日本人の存在を私が知ったのは、二〇〇六年夏のことである。ドイツのベルリン映画博物館から、日独関係史研究を英語・ドイツ語で発表してきた数人の日本人研究者に宛てて寄せられた、一通の電子メールからであった。

それによると、ドイツ統一後のベルリンの象徴として作られたポツダム広場の映画博物館が刊行している映画人シリーズに、戦後西ドイツの著名な女流映画評論家であったカレーナ・ニーホッフの追記が追加されたことになった。ユダヤ系ドイツ人である彼女の戦時遺品

中、彼女が一九四二―四三年に日本鉄鋼製鋼会ベルリン事務所に勤務し、ユダヤ人用食糧配給券の偽造でナチス・ゲシュタポに検挙されたさい、在独日本大使館嘱託で日本鉄鋼製鋼会ベルリン事務所のアナリストである「崎村茂樹」という日本人の奔走と助命嘆願書で生命を救われ、戦後に生き残ることができたという資料がある。その「崎村茂樹」とは何者かを知りたい、という問合せであった。

当時、ベルリン映画博物館から連絡を受けた一橋大学勤務の私、東京大学経済学部石見徹教授、成城大学法学部田嶋信雄教授ら七人で「崎村茂樹探索ネットワーク」を作り、私の個人ホームページ「ネチズンカレッジ」を使って、世界中に情報提供を呼びかけた。即座にさまざまな情報が寄せられ、崎村家ご遺族や東京大学農学部関係者からも、ある程度の情報が集まった。

カレーナ・ニーホッフの評伝は、二〇〇七年一月に刊行された。崎村の同盟国日本大使館員の地位を利用した、一九四三年春当時の助手、ユダヤ人女性カレーナ・ニーホッフへの助命嘆願書を書いての救済は、カレーナ自身が戦後に生き残り、嘆願書類や写真を残したことにより、事実と認められた

(ベルリンの「シントラーのリスト」「もう一人の杉原千畝」)。私たちのそれまでの、にわかづくりの調査結果も、同書に盛り込まれた。同書によれば、戦火をくぐり生き延びて映画ジャーナリストになったカレーナが、戦後西独で生涯のパートナーとするのは、ドイツ社会民主党の重鎮で、一九六九年の日独核保有秘密協議やブランド政権期の東西融和交



カレーナ・ニーホッフの評伝

涉に重要な役割を果たしたエゴン・パールであった (Karen Niehoff, *Feuilletonistin und Kritikerin. Mit Aufsätzen und Kritiken von Karen Niehoff und einem Essay von Jörg Becker. Film & Schrift, edition text + kritik, München 2006. NHKスペシャル取材班『核』を求めた日本―被爆国の知られざる真実』(2012年)。*

ただし、当初想定したストーリーは、狂つてきた。私たちは、崎村のユダヤ人教授がナチスのゲシユタポににらまれ監視される理由となり、在独日本大使館の狂信的親独派大島浩大使との関係が悪化してストックホルムに「亡命」したと考えたのだが、どうもこの件で崎村茂樹が処分されたり大使館に居づらくなったという形跡はなかった。四三年九月のスウェーデン行きは、鉄鋼統制会アナリストとしての「出張」名目であった。

私たちの何人かは、ドイツ、スウェーデンの現地調査を行ない、ドイツ連邦公文書館・外務省史料館やカレナ・ニーホッフ家に残された崎村関係資料の収集、当時の現地新聞記事やベルリン、ストックホルムの住所・寄信先の調査、インタビューを進めた。あわせて探求を、四五年五月ドイツ敗戦時の崎村のベルリン脱出、シベリア鉄道経由の満州国への入国、日本敗戦後長春での残留、戦後内戦期、中国革命時の活動へと広げていった。その中間報告は、二〇〇七年三月、早稲田大学二〇世紀メディア研究所の公開講演会で評論家佐藤優氏と共にパワーポイント原稿で行ない、「インテリジエンス」誌第九号に「情報戦のなかの「亡命」知識人―国崎定河から崎村茂樹まで」と題して発表した(二〇〇七年二月、<http://homepage3.nifty.com/katote/sakinura.html>)。

「インテリジエンス」論文発表後、公開講演会で一緒に報告した佐藤優氏が、それまで全く証言の得

られなかった戦時在独日本大使館関係者のなかから、元外務省アメリカ局長吉野文六氏に私の論文を示して確認を求め、事実と認められた(佐藤優「国家の魂 第二回」連参戦前夜「現代」二〇〇八年八月号)。さらに米国国立公文書館(NARA)所蔵で、現在では日本の国会図書館等でも閲覧可能な連合軍押収文書の在独日本大使館内部記録中に「崎村茂樹問題文書(在独内務事務所佐藤彰三作成)」(Records of Former German and Japanese Embassies and Consulates, 1890-1945 国会図書館保存資料室所蔵 YD-176, NARA Microcopy T179, Reel No. 2)を発見し、当時連合国側のメディアでのみ報道され、米国諜報機関(諜報情報局OSS、戦後の中央情報局CIA)に秘かに記録され、枢軸国ドイツ・日本側は否定し沈黙してきた「在独日本大使館員のスウェーデン亡命と連合国との接触」が、史実として開示されないものとなった。

4 戦時中立国スウェーデンで亡命者を助けた社会民主主義

ところが、それでは終わらなかつた。「崎村茂樹問題文書」など新たに発見した資料で、崎村の「亡命」の事実関係はかなり明確になったが、肝心の「亡命」の動機がはつきりしないのである。以下は「インテリジエンス」論文のその後の研究にもとづく改訂を兼ねた、一九四三年九月ストックホルムでの崎村の「亡命」から、四四年五月ベルリンへの強制送還までのスケッチである。

崎村茂樹のスウェーデン入国は、一九四三年九月七日で、計画的な「亡命」ではなかつた。前述の

ように当初は日本鉄鋼統制会の公務出張を兼ねた休暇名目で入つたらしい。ところが九月一〇日、読売新聞ストックホルム特派員藤野満洲雄がベルリンに転動するにあつての現地日本人による壮行運動会に参加し、偶発的な事故で足の怪我をした。そこで入院した病院で、レクター・サンドベルグ (Rector Per Sundberg) というスウェーデン人教師と同室になった。すぐに親しくなり、空襲のベルリンには戻らずスウェーデンに滞在することを勧められ、当時ストックホルム大学講師でスウェーデン社会民主労働党思想誌「Tids」編集長だつたトルステン・ゴルトルンドが率いる反ナチ知識人亡命者支援組織に組み込まれた。四三年二月初めから、スウェーデン日本公使館にパスポートを取り上げられた状態のまま、「亡命」生活に入り、行方をくらました。

一九四四年一月には日本外務省囑託を解任されたが、約五〇人のスウェーデン人、一〇人のドイツ人、二人のノルウェー人の支援を受け、労働市場調査の仕事も紹介された。崎村は、戦火を離れ、森と湖に囲まれたストックホルムで、同年輩の経済学者ゴルトルンドや、先にドイツから亡命していたドイツ社会民主党 (SPD) 在外ネットワーク組織者であるユダヤ系教育学者フランツ・モクラウアーらの庇護のもと、ドイツ語で一九四二年に刊行した『日本経済の新編成』に続く二冊の本、『日本の農業経済』『日本経済史』を準備していたという。

ベルリン日本大使館とストックホルム日本公使館は、この間、崎村の行方を捜し求めていた。またナチスのゲシエタポとスウェーデン警察、それに連合軍側の英国情報機関MI6、米国情報機関OS

も、日本共産党の日本共産党員がスウェーデンへの「亡命」に注目し、秘かに追っていた。

ところが一九四四年五月、崎村の海外「亡命」生活は、戦時ヨーロッパの情報戦に巻き込まれ、中断を余儀なくされる。きっかけは、「インテリジエンス」論文で紹介した「ニューヨーク・タイムズ」一九四四年五月一日付記事「日本人が大使館から脱走」、「タイム」誌六月五日号「抵抗の方法」という米国メディアの報道ではなかつた。それは、英国の新聞と戦時の大衆宣伝メディアであるラジオでのロイター電報道だつた。「ニューヨーク・タイムズ」記事は、ロイター電をもとにしたものだつた。

一九四四年四月二八日、ゴルトルンド講師の紹介状を持って、連合軍側有力紙、イギリス「デイリー・メール」ラルフ・ヘーウィンス特派員が、ドイツ、日本の事情を執筆してほしいと、崎村の潜伏先に現われた。「亡命」中とはいえ、平穏な学究生活を望む崎村は、面談はしたものの、反ナチ論文の執筆依頼を断つた。

ところがその面談が、「デイリー・メール」五月一日付の「日本人外交官がベルリンから逃亡して語る」「東條の部下から連合軍へのアピール」というセンセーショナルな記事になる。ロイター電で世界に配信され、ラジオでも放送されたため、リスボンの在ポルトガル陸軍武官室や同盟通信のヨーロッパ特派員網もスウェーデン政府と在独日本大使館に問い合わせ、本格的捜索に動きたす。

スウェーデン日本公使館陸軍武官小野寺信と同盟通信ストックホルム特派員斎藤正躬が崎村の隠れ家をみついたらしく、崎村は「デイリー・メール」記者の捏造記事であると否定したが、弁明を迫られた。ナチスのドイツ通信 (DNB) での反論ラジオ番組がただちに生まれ、五月五日にはドイツの新

間にも「崎村教授は英米に利用された」といふ否定記事が掲載された。ナチ党にとつても重大事件だつたらしく、一九四四年五月初めの「ゲッベルス日記」には、三回も「崎村教授の事件」が出てくる。

ドイツの外務省・ゲシュタポからは「東京のソルゲ事件への報復」(ドイツ国籍の「ゲルマン人」であるソルゲ検挙・裁判への反発)として崎村の身柄引き渡しが要求され、在独日本大使館でも「大逆罪」の声があつたが、どうやら同盟通信者齊藤特派員と鉄鋼統制会ベルリン事務所長島村哲夫が説得役になり、在独内務省事務所佐藤彰三とベルリン総領事徳永太郎がストックホルムに赴いて五月二三日崎村を拘束・拉致、ベルリンへの「強制送還」になつた。それをスウェーデンの新聞・雑誌は写真入りで大々的に扱い、「タイム」誌六月五日号の記事に繋がつた。

以後、ナチス・ドイツに送り返された崎村がどうなつたかは、ドイツ外務省史料館所蔵のドイツ政府と在独日本大使館の交渉ファイルや現地調査から「インテリジエンス」論文に記した通りで、日本大使館による奇妙な身柄拘束・軟禁・監視が、四五年五月ドイツ敗戦まで続いた。中国での崎村の波瀾万丈については、ここでは省略する。

5 ブラントらの社会民主主義「小インターナショナル」

戦後まで生き残り得た理由の一つとなつた。生活手段まで面倒を見ていたのは、中立国スウェ

デンの外交官長官の活動家もあつた。じつはこのことが、崎村茂樹が「大逆罪」に問われず、戦後まで生き残り得た理由の一つとなつた。

一九四四年五月二八日、在独内務省事務所佐藤彰三は「崎村事件に関する調査」を作り、六月一日付で崎村茂樹は「今回ロイター事件は其の波紋極めて大きく全く恐縮に堪えず」という「誓約書」を書かされた。東京の外務省本省・参謀本部にはおそらく連絡されないまま、在独日本大使館内で一件落着がはかられた。すでに日本への公電連絡さえ困難になつた欧州戦線の通信事情もあるが、日独同盟に傷をつけない配慮であつたらう。

その過程で、内務省の佐藤彰三・鉄鋼統制会島村哲夫、スウェーデンの陸軍武官小野寺信、同盟通信者齊藤正躬らの間で、崎村の「亡命」を大事にしないための策略が練られた。ポイントは、崎村「亡命」時の生活費の出所(スポンサー)、それに、崎村の左翼運動・思想歴、第三インターナショナル(共産主義インター、コミンテルン、一九一九―四三年)との関わりだつた。

戦時ヨーロッパの日本人特派員の多くは、派遣先取材相手や在外日本人の思想動向を探る諜報員の役割を果たした。齊藤特派員が佐藤彰三にあてた、崎村の身上調査が「崎村事件に関する調査」に付されている。それによると、崎村は「初步的な唯物論の把握」はあるが、左翼思想・運動歴はなく、「亡命」先のストックホルムでも「第三インター系には現在まで何等交渉なし」。スウェーデンの亡命者支援組織から月一五〇クローネほどの援助を受けていたが、それは交友関係を含め「第二インター系統」であるから心配ない、むしろ崎村を謹慎させたうえで、彼の学識を今後も日独枢軸国の勝利の

ために使えし、というものであった。

つまり、在独日本大使館も在スウェーデン日本大使館も、崎村の「亡命」の背後に第三インターナショナル系列の共産主義運動があるのではと疑ったが、彼は「第二インター系統」の社会民主主義の方だから大丈夫だという。まことに日本的・治安維持法的な発想のおかげで、崎村茂樹の生命は助かった。

小論の問いは、ここから始まる。「インテリジェンス」論文を発表後、ドイツ現代史の専門家である永井清彦氏から、新たな情報が寄せられた。自分が読んだヴァイリ・ブランドの北欧亡命期の回想中に、ドイツの日本大使館から逃げてきた日本人のことがでてくる。それが「インテリジェンス」論文にある崎村茂樹ではないか、というのである。そしてそれは、永井氏も、佐藤優氏とは別に、戦時在独日本大使館の生き証人吉野文六氏に問い合わせ、間違いないものと確認された。

一九四三―四四年当時のストックホルムには、ナチスに追われたり、戦場・占領地から避難した世界の社会民主主義者が、多数滞在していた。その中心は、ドイツ社会民主党の亡命者組織であり、そこから「ストックホルム民主主義的社會主義者のインターナショナル・グループ」が生まれた。支援するスウェーデン社会民主労働党員を含め、最大時百人にも満たない、小さな国際連帯組織（匿名アラブ・インテルナショナル・ホインターナショナル）であったが、ドイツ、オーストリア、ポーランド、ハンガリー、チェコ、ノルウェー、デンマーク、フランス、スペイン、パレスチナ、アイスランド、イギリス、アメリカなどから、ストックホルムに「平和」を求めた社会民主主義者たちが集っていた。

それは、戦後ヨーロッパ統合と福祉国家、いや戦後世界の「民主主義的な社会主義」「差異のデモクラシー」の行方にも、大きな意味を持った。

中心的指導者は、亡命中のドイツ社会民主党員ジャーナリスト、ヴァイリ・ブランドであり、ナチス敗北後、西ベルリン市長から西ドイツ首相までのぼりつめた。一九七一年のノーベル平和賞受賞者であるブランド『抵抗—レジスタンス』筑摩書房、一九七二年。

この組織を共に担った盟友のユダヤ系オーストリア人ブルーノ・クライスキーは、戦後オーストリアで外交官となり、永世中立国の地位を回復、初のオーストリア社会党政権の首相となる。ちょうど亡命時代の「戦友」ブランドが、西ドイツで首相になったころだった。

世界から亡命社会民主主義者を受け入れ支援したホスト役は、スウェーデン社会民主労働党員のかなが、反アジズム国際主義者たちである。中立国スウェーデンの知識人や国際活動の経験者が多く含まれていた。そこに、カール・グンナー・ミユルダールとアルバ・ライマル・ミユルダール夫妻の名がある。夫のカールは、当時ストックホルム商科大学の経済学者で戦後は通商大臣を務めたストックホルム学派の重鎮で、一九七四年にフリードリヒ・ハイエクと共にノーベル経済学賞を受賞した。妻のアルバも、スウェーデン福祉政策の推進者で、ユネスコや国連革新会議で活躍した。一九八二年にはノーベル平和賞を受賞し、夫と共に終生、世界平和の提唱者・牽引者となった。

ここでは、戦後社会民主主義・労働運動の国際組織再建（社会主義インターナショナル）、スターリン率いるソ連と共産主義への態度、戦後国際金融経済秩序や植民地支援の構想、信教の自由と国際



ワイリ・ブランドの回想

法、軍縮と世界平和の将来が討論されていた。

そして、この小規模だが密度の濃い国際社会主義の亡命者組織の例会に、ただ一人アジアから、しかもナチスの同盟国日本からの亡命者が顔を出した。崎村茂樹である。一度だけのことと思われるが、よほど印象に残ったのが、ノーベル平和賞受賞後のワイリ・ブランドは、回想に書き残した。

われわれの会合への風変わりな訪問者は、一人の若い日本人だった。彼は、ベルリンの日本大使館で仕事をしていて、われわれを見つけた。日本の秘密警察が彼を追っていたので、彼は、ある病院に助けを求めた。それから説得されて、ベルリンに戻った。おそらく、悲劇的結末にいたつたであらう。(Willy Brandt, *Links und frei: Mein Weg 1930-1950*, Hoffman und Campe, 1982, S. 34. 奔

清彦提供)

無論、ブランドは知らなかった。この日本人の若い経済学者(当時五感)が生き残り、のちにニエールと一緒になobel経済学賞を受賞する原理的自由主義者ハイエクの日本への紹介者の一人で面識もあつたことを。また、当時のスウェーデン政府大蔵次官・スウェーデン銀行総裁ダグ・ハマーシヨルドとも会つていたらしいことも。ハマーシヨルドは、国連事務総長時代の一九六一年、コンゴ

動乱時に飛行機事故で亡くなる。死後にノーベル平和賞が授与されたから、「亡命者」崎村茂樹のまわりから、戦後五人ものノーベル賞受賞者が出ることになる。

ワイリ・ブランドと社会主義「小インターナショナル」を調べるには、ドイツに赴くしかない。ボンドイツ社会民主党フリードリヒ・エーベルト財団にワイリ・ブランド・アーカイブがあり、そこで当時の記録を閲覧したが、新しい発見はなかった。その代わり、今日、北歐社会主義の歴史的研究で知られるクラウス・ミスゲルドの学問的原点が、彼の博士論文での「クライネ・インテルナツィオナレ」の研究だつたことがわかった(Klaus Misgela, *Die "Internationale Gruppe demokratischer Sozialisten" in Stockholm 1942-1945: zur sozialistischen Friedensdiskussion während des Zweiten Weltkrieges*, Bonn-Bad Godesberg, Verlag Neue Gesellschaft, 1976)。またウイーン大学図書館で、一九四三年に崎村茂樹と等信太郎がウイーン大学での講演会に招かれたが、ドイツ政府により許可されなかった記録が見つかった。

もつとも私の主要な関心は、当時の米国OSSヨーロッパ総局長、スイスのアレン・ダレス(戦後CIA長官)の戦時諜報ネットワークが、「亡命」日本人崎村茂樹との接触と共に、ストックホルムの社会主義国際組織にまで及んでいたかどうかにある。

日本で社会主義の国際連帯といえば、通常「鉄の規律」で結ばれた共産主義のコミンテルン、コミンフォルム系列がイメージされる。私自身も、その系列の歴史と「連邦防衛」が百人近い日本人粛清に帰結した悲劇を追いかけてきた(独逸国境を渡るエトピア—国民国家のエルゴロウ—平凡社ライブラリー

二〇〇三年。

しかし、ナチスに追われ「亡命」したのは、ユダヤ人や共産主義者ばかりではない。第二次世界大戦期には、社会民主主義者も自由主義者も敵国を追われ、世界に分散して緩やかなネットワークを保っていた。ストックホルムの「小インターナショナル」もその一つで、そこでブランドやミエルダール夫妻がナチズム打倒後の世界を構想していた。それは、ヨーロッパ統合や平和共存、国際通貨体制、貧困国開発援助、「持続しうる地球」に連なるものであつたに違いない。共産主義の「現存した社会主義」にきあと、それは、ある種の社会主義の生命力を示す事例でもある。

そして、その生命力とは、北欧社会民主主義の福祉国家に代表される制度設計・政策体系はもちろんであるが、崎村茂樹のような無名の日本人を「スパイ」と疑うことなく受け入れ、その後の運命を心配するような、人間へのまなざしとネットワークの開放性、「差異のデモクラシー」であつた。西欧社会民主主義の「原子力」観についても、「小インターナショナル」関係者からなんらかの示唆が得られないか、私の探求の旅は、なお道半ばである。読者の情報提供を、再度お願いする (Editorial Note)。

〔参考文献〕

加藤哲郎『国境を越えるエトピア—国民国家のエルゴロシー』平凡社、二〇〇二年

加藤哲郎『情報戦と現代史—日本国憲法へのもうひとつの道』花伝社、二〇〇七年

加藤哲郎・今井晋哉・神山伸弘編『差異のデモクラシー』日本経済評論社、二〇一〇年

加藤哲郎・小野一・田中ひかる・堀江孝司編『国民国家の境界』日本経済評論社、二〇一〇年

加藤哲郎・丹野清人編『民主主義・平和・地球政治』日本経済評論社、二〇一〇年

ISBN 978-4-624-30118-7
NHK受信料を考える
死刑廃止と死刑存続の是非

紙幣



QR URLをメールで送信



http://blog.goo.ne.jp/himizu-mina/e/1274126be177ad2105459212615815a

ページ 5/5

現代世界—その思想と歴史④
リベラル・デモクラシーとソーシャル・デモクラシー

発行——二〇一三年一月三十日 初版第一刷発行

定価——(本体二四〇〇円十税)

編者——田中浩
発行者——西谷能英
発行所——株式会社 未来社

〒112-0002 東京都文京区小石川三十七-1
電話〇三三八二四一五五二
<http://www.miraisha.co.jp/>
Email: info@miraisha.co.jp
掲載〇〇一七〇一三二八七三三五

印刷・製本——萩原印刷

ISBN 978-4-624-30118-7 C3030
© Hiroshi Tanaka 2013